一番茶総評

令和５年５月２３日

本年の県内産の一番茶は、降水量は少なかったものの１月から３月の気温が平年より高く推移し、４月に入ってからも高い日が続き昨年より５日ほど早く生産が始まりました。生育は、順調でしたが頂芽と側芽の生育差が大きく芽の大きさにバラツキが見られました。４月中旬には朝晩の冷え込みがあり、芽伸びが緩やかとなり反収が伸びず、一部の防霜施設のない圃場では霜の被害がありました。降雨が少なく摘採が順調に進んだため、収量の大きな増加はなく硬葉化による品質低下も見られませんでした。５月が近づくと収量はやや増加したものの上場数量は、４月２９日をピークに４万 kg 台が続き山のない取引となりました。

取引状況は、新型コロナウィルス感染症が治まり、イベントの開催や店舗の営業がコロナ以前に戻り、人の動きが活発化した中での取引となりました。物価の上昇により消費者の購買意欲が上がらず、消費地からの引き合いが弱く予約注文は数量がまとまりませんでした。また、贈答用の高価格帯の動きが鈍く、仕入れは慎重な姿勢となりました。繰り越し在庫量は多く、需要の低迷や減少のよる先行き不透明感から品質重視の選択買い・必要買いに終始し、軟調な取引となりました。５月に入り年間販売用の仕入れに切替わる頃には、早場所は終了し中・遅場所中心の取引となりました。中山間地や山間地の形状物の引き合いが強くなり、東部地区もドリンク原料の需要により下げ止まり感が見られ、平均単価は１割ほど高くなりました。芽数が少なく芽伸びが緩慢、順調に行われた摘採、品質重視の生産などから生産量は、地域や工場間によって差はあるものの減収となり台風被害による摘採面積の減少も少なからず影響し、弊社の取扱数量は少なくなりました。収量が少なく単価が上がらない、生産コストだけが上昇する一番茶となりました。